

## 現代モロッコにおける女性王族の婚姻, 血統および社会的地位

### Female Members of the Royal Family in Modern Morocco: Their Marriages, Lineages, and Status

白谷 望

Nozomi SHIRATANI

This article examines the recent transition in the status of Moroccan female royals through the public's reactions to the monarchy and political situations. Morocco is an Arab monarchy characterized by historical "continuity" and "stability." Mohammed VI has undertaken many political and social reforms, one of which is the improvement in the status of women. Female royals who began being active in the public sphere became representatives of female leaders in their society. Princess Salma, the first princess consort to emerge publicly, was the most prominent figure during this transition period of the status of women. However, there are risks related to open-minded royals, such as damaging the royal family's image. Currently, the media reports divorce cases in the royal family and discord among royals. The Moroccan monarchy must carefully decide what it reveals to the public to maintain its stability.

#### はじめに

近年、アラブ諸国の王妃らの交流が注目を集めている。2014年10月18日、ヨルダンのラーニア王妃の公式 Facebook に、ラーニア王妃とモロッコのサルマ王妃との自撮り写真が掲載された<sup>1</sup>。両王妃の美しさもさることながら、親しい間柄がうかがえる SNS 上の二人の姿は、アラブ世界のファース

\* 本稿は JSPS 科研費 19H01317 による研究成果の一部である。

<sup>1</sup> <https://www.facebook.com/photo/?fbid=10152319761570826&set=pb.100044331164693.-2207520000>  
(2022年10月10日閲覧)。

ト・レディーの新たなスタイルを映し出したものとして、世界中で注目された<sup>2</sup>。2016年には、モロッコで開催されたフェス世界宗教音楽フェスティバル（Festival de Fès des Musiques Sacrées du Monde）にカタルの国王夫妻が招待され、煌びやかな伝統衣装を身にまといフェスティバルに出席するカタルのモーザ妃とサルマ妃の様子が、モーザ妃の公式 Instagram で公開された<sup>3</sup>。

近年では、ヨーロッパ諸国の王族を中心に、彼らの公務や日々の生活の様子が、新聞やテレビだけでなく、SNS を通じて積極的に発信されるようになっていく。日本でも、皇族数の減少や女性皇族の嫁ぎ先の問題に関係して、多くの国民がそのあり方や彼らの活動への関心を高めている。こうした世界的な王族メンバーのメディアを通じた広報活動は、アラブ諸国も例外ではない。その近年の特徴として挙げられるのが、上記のような公の場での女性王族の登場とその活躍である。アラブ世界では歴史的に、王族内の女性が表舞台に立つことは少なく、その結果、王族メンバーの中でも女性王族の役割が注目を集めることはなかった。アラブの王妃たちに関する数少ない研究の一つとして、サウディアラビアの王妃の生涯を綴ったケシシヤンの研究があるが<sup>4</sup>、これも同国の女子教育の発展や政治に貢献した第3代国王ファイサル（在位 1964～75 年）の妃イファトを扱ったのみである。本稿が対象とするモロッコでも、女性王族が表舞台で活動するようになったのは、ここ 20 年のことであり、彼女らに焦点を当てた研究はほとんど存在しない<sup>5</sup>。

本稿では、アラブ世界に現存する君主制の中で、最も長い歴史を有するモロッコを対象とし、これまで注目されることの少なかった女性王族について、彼女らをめぐる近年の変化をとりわけ国民の心理という側面と政治状況から検討する。本論文の構成は以下の通りである。まず始めに、預言者ムハンマドの血統を主張するモロッコ王家の歴史を概観し、現在の王族の範囲を

<sup>2</sup> 白谷望「コラム 13：アラブ世界の王妃の新たなスタイル」水島治郎・君塚直隆（編）『現代世界の陛下たち：デモクラシーと王室・皇室』ミネルヴァ書房、2018、278。

<sup>3</sup> <https://www.instagram.com/p/BFFRJ1YHvNZ/>（2016 年 5 月 9 日投稿；2022 年 10 月 10 日閲覧）。

<sup>4</sup> Joseph A. Kéchichian, *Ifat Al Thunayan: An Arabian Queen*, Eastbourne, Chicago and Toronto: Sussex Academic Press, 2015。

<sup>5</sup> 例えば、モロッコ政治に影響を与えた女性らを紹介する以下のような書籍でも、女性王族が取り上げられることはない。Osire Glacier, *Femmes politiques au Maroc d'hier à aujourd'hui: La résistance et le pouvoir au féminin*, Casablanca: Tarik Éditions, 2013。

確認する。次に、外から王室にやってくる女性として、王妃を取り上げる。モロッコでは、王妃が表舞台に立つようになったのは、現国王ムハンマド6世の配偶者であるサルマ王妃からである。第II節では、こうした王妃の地位や役割の変化を中心に議論を進める。第III節では、「聖なる」血統を継承する女性として、国王の娘である王女たちを取り上げる。外部の家系から王室に入る王妃とは異なり、王女たちは王家の血統に連なる者らであるため、この章では特に、血統を継承する王女らが、その嫁ぎ先としてどのような人物を配偶者としているのかを分析する。その後、第IV節では、男性王族と比較することで、これら女性王族の活動や公務を分析する。女性王族に特有の活動はあるのか、女性王族が公の場での活動を増やし、それがメディアなどで積極的に報じられることで、国民の王族に対する捉え方にどのような変化が起きているのかを、ここでは議論する。これらの議論を通じて、モロッコの王室をめぐる近年の変化と国民や社会に与える影響、そしてそれらの課題を明らかにする。

## I. モロッコ王家

### 1. アラブの君主制

アラブ地域では現在、アラブ連盟を構成する22か国のうち、8か国（モロッコ、ヨルダン、サウジアラビア、バハレーン、アラブ首長国連邦、カタール、オマーン、クウェート）が君主制を採用しており、君主制国家の割合が他地域と比較すると非常に高い。その数は、多くのアラブ諸国が独立を果たした第一次世界大戦後にはさらに多く、独立直後のアラブ諸国はほとんどが君主制であった。当時の統治者らにとって、君主制の採用はごく自然な選択であった。それは、西欧諸国によってすでに採用されていた統治形態の模倣であり、また、オスマン帝国領に組み込まれていたさまざまな地域で普及した王朝支配の継続形態であった<sup>6</sup>。しかし、第二次世界大戦後には、世界的な君主制廃止の潮流が強まり、アラブ地域もその例に漏れず、多くの君主制が崩壊した。かつてサミュエル・ハンチントンは、「近代化が進むと君主制

---

<sup>6</sup> Joseph Kostiner (ed.), *Middle East Monarchies: The Challenge of Modernity*, Boulder and London: Lynne Rienner Publishers, 2000, 5.

の維持が難しくなる」という命題を提示し、それを「国王のジレンマ」(king's dilemma)と名づけた<sup>7</sup>。一般的に、近代化の過程で王室は、政治改革を実行するために国王への権限集中を進めなければならない。しかし、国王への集権化は体制内部から反対派を生み出し、体制外部では近代化によって生じた中間層の政治参加を困難にすることに繋がるからである。

1950年代から60年代は、アラブ地域において君主制崩壊の波が押し寄せた時期であった。この時期に崩壊したアラブの君主制は、エジプト（1952年、革命）、イラク（1958年、クーデタ）、チュニジア（1958年、議会により王制廃止）、イエメン（1962年、クーデタ）、リビア（1965年、クーデタ）である。このうち、1956年にフランスからの独立を果たし、その後議会によって王制が廃止されたチュニジアを除き、革命もしくはクーデタによって崩壊した君主制は、「国王のジレンマ」に陥った事例と言えよう<sup>8</sup>。

現存しているアラブの君主制においても、そのほとんどが20世紀の産物であり、その成立と発展は帝国主義の世界戦略と密接に結びついている<sup>9</sup>。例えばモロッコと同じく預言者ムハンマドの末裔を名乗るヨルダンの初代国王アブドゥッラー1世（在位1921～46年）は、もともとヨルダンが位置する地域の出身ではなく、サウディアラビアのメッカの名門一族で預言者ムハンマドの一族でもあるハーシム家出身であり、1921年にイギリスによって据えられた国王である。イギリスは、当時オスマン帝国からの独立を要求していたアラブ民族に対し、その独立への支持を約束し、その後国際連盟によってパレスチナにイギリス委任統治領パレスチナが創設された。ヨルダンは、その英国委任統治領パレスチナの管轄下におかれる一種の保護国であったトランスヨルダンを前身とし、1946年にトランスヨルダン王国として独立した。その後、トランスヨルダン王国は1950年にヨルダン川西岸を統合し、現在の「ヨルダン・ハーシム王国」に改称された<sup>10</sup>。

20世紀の産物とも言われるアラブ君主制国家の中で、アラブ地域の最西

<sup>7</sup> Samuel P. Huntington, *Political Order in Changing Societies*, New Haven and London: Yale University Press, 1968.

<sup>8</sup> 白谷望『君主制と民主主義：モロッコの政治とイスラームの現代』ブックレット《アジアを学ぼう》別巻11, 風響社, 2015, 11.

<sup>9</sup> 栗田禎子「サウディアラビア：アラブの専制君主」浜林正夫ほか（編）『世界の君主制』大月書店, 1990, 85.

<sup>10</sup> 白谷『君主制と民主主義』11-12.

端に位置するモロッコは、地理的に離れていることのみならず、その歴史も全く異なる過程を経ており、17世紀に確立されたアラウィー朝（1664あるいは68年～）が今日に至るまでモロッコを統治している。これは、現存するアラブ君主制の中で最も長い歴史を持つ王朝であり、モロッコ歴代国王が支配体制を確固とするために利用してきたのが、この王権の連続性である。

## 2. モロッコの君主制

現在のモロッコ王家は、17世紀に国家統一を果たしたアラウィー朝初代スルタンのムーレイ・ラシード（在位1666～72年）の系譜にあり、現国王のムハンマド6世はアラウィー朝第23代君主にあたる。モロッコが位置するアフリカ大陸の北西端は、この地域における7世紀からのイスラーム化以降、いくつかの王朝によって統治されてきた。しかし、現モロッコの国土の大部分は常に同じ王朝の統治下に組み込まれ、その統治体制が非常に脆弱なものであったとしても、国土が大きく分断された経験を持たない<sup>11</sup>。16世紀には隣国アルジェリアまでがオスマン帝国領に組み入れられたが、モロッコはその支配を逃れた。また、1912年からフランスとスペインによる分割保護領になった際にも<sup>12</sup>、17世紀に確立されたアラウィー朝の王家が統治する政治体制が形式的にはあるが存続した。こうした歴史は、独立後のモロッコにおいて、国民国家の枠組みや国民の忠誠心を育みやすい土壌を提供したと考えられる<sup>13</sup>。

そこで独立以降の各国王は、モロッコが位置する地域を治めた歴代君主の連続性と伝統を、さまざまな場面で繰り返し強調してきた。例えば、前国王ハサン2世（在位1962～99年）は、「モロッコは、[この地域の] イスラーム化後の1世紀にあたる、預言者ムハンマドの子孫[イドリース朝始祖のイドリース1世、在位788～93年]が即位した788年からの歴史による産物」

<sup>11</sup> Ibid., 18.

<sup>12</sup> 現在のモロッコが位置する地域は、1912年から1956年まで、その大部分がフランス領に、北部と南部（現在の西サハラ）がスペイン領となった。なお、モロッコは1956年に両国からの独立を果たしたが、その後も西サハラ地域はスペイン領として維持された。1975年にスペインが西サハラ地域の領有権を放棄してからは、モロッコとモーリタニアの分割統治が行われた後、その領有権を主張するモロッコと独立を求めるポリサリオ戦線（Frente Popular de Liberación de Saguia el Hamra y Río de Oro: POLISARIO）の間で、現在まで対立が続いている。

<sup>13</sup> 白谷『君主制と民主主義』18.

と語っている<sup>14</sup>。つまりモロッコは、12世紀以上続く王朝国家としての歴史を持ち、その歴史は預言者ムハンマドの末裔であるシャリーフによる統治か

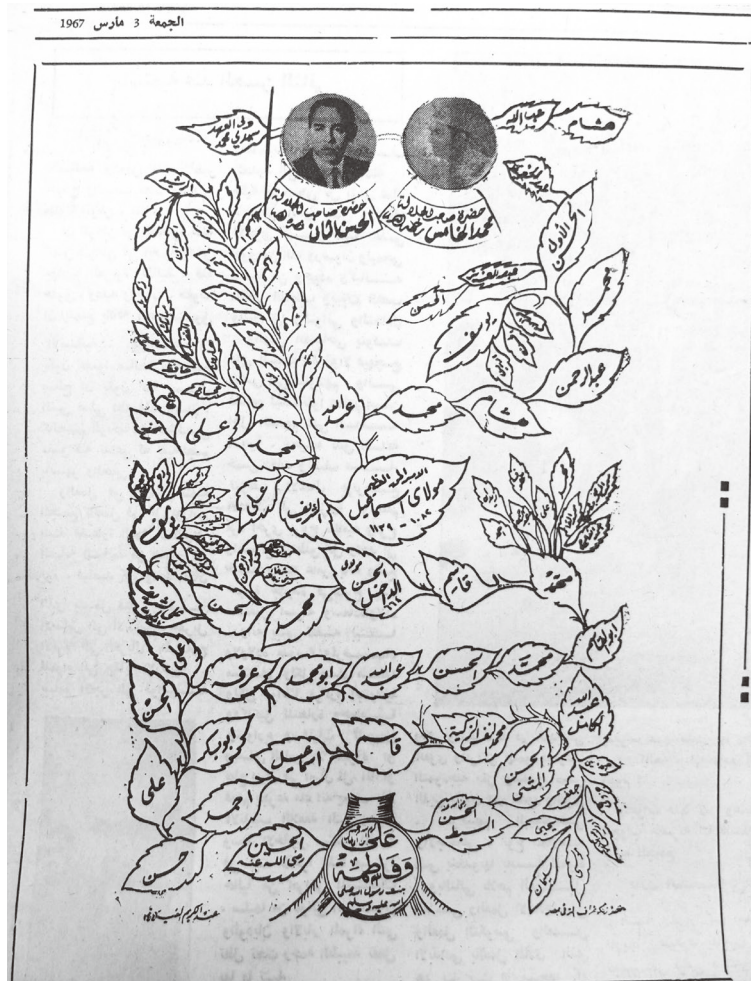


図1 1967年3月3日の新聞に掲載された王の系譜  
出典：Al-Anbā', March 3, 1967.

<sup>14</sup> Frédéric Rouvillois and Charles Saint-Prot (eds.), *Vers un modèle marocain de régionalisation*, Paris: CNRS éditions, 2010, 19.





13 世紀にアラビア半島から移住してきたとされるアラウィー家は、このシャリーフの血統を主張している。毎年国王の即位記念日には王党派の新聞に国王の系譜が掲載される（図 1.2）。なお、16 世紀に成立した前王朝のサ

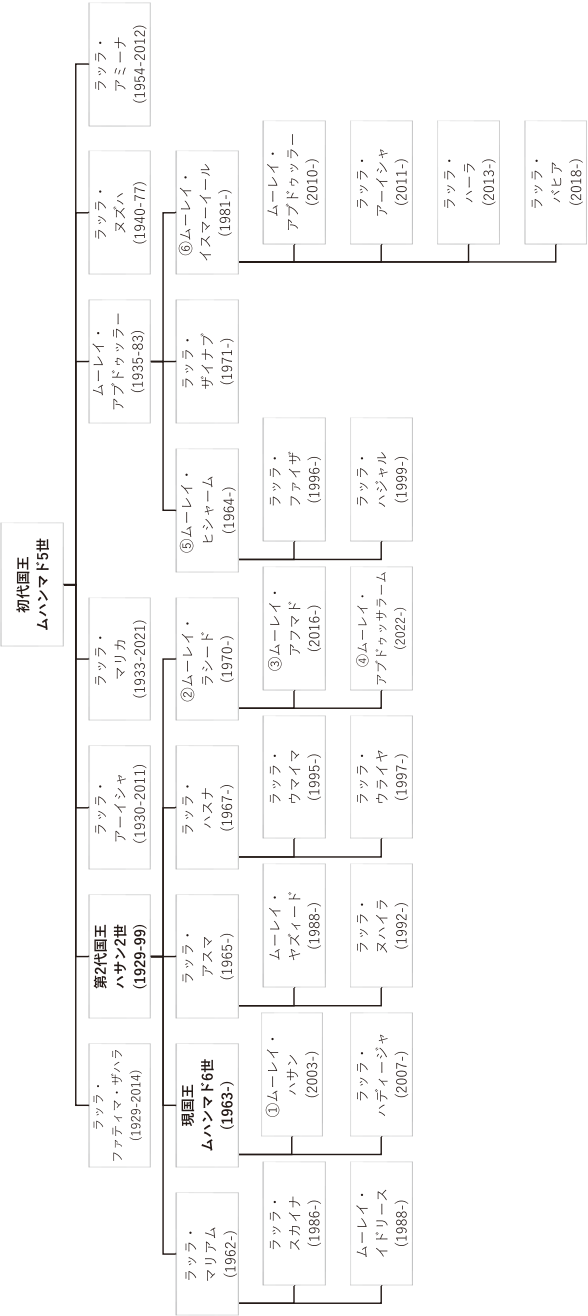


図 3 独立以降のモロッコ王室

出所：筆者作成

\* 太字は歴代国王を示している。

\*\* 名前の前の数字は、王位継承順位を示している。

\*\*\* 現在の王位継承順位は、以下の通りである。王位継承権第1位 ムーレイ・ハサン (19歳、国王の息子); 第2位 ムーレイ・ラシード (52歳、弟); 第3位 ムーレイ・アフマド (6歳、甥); 第4位 ムーレイ・アブドゥッサラーム (0歳、甥); 第5位 ムーレイ・ヒシャーム (58歳、従弟); 第6位 ムーレイ・イスマエーイル (41歳、従弟)



アド朝（1541～1659年）<sup>15</sup>もシャリーフの血統を主張していた。森本は、このようなモロッコ独特の状況を、「こうした歴代のシャリーフ王朝による支配をつうじて、この国には、国王はシャリーフでなければならないという政治文化が根づいている」と分析している<sup>16</sup>。

預言者ムハンマドの末裔であるシャリーフが国家を統治することが、なぜ「正統」と捉えられるのか。モロッコの文脈で重要なのが、シャリーフの血統によって継承される「バラカ」(baraka 恩寵)の概念である。シャリーフは、バラカを血統によって相続している。国王が行幸で地方を訪れた際、歓迎の儀式で出される乳とナツメヤシの実に、国王は指を入れるか、軽く口をつける。国王の接触によってバラカを含んだ乳は大地に注がれ、ナツメヤシの実には蒔かれる。これは、それらが豊饒をもたらすと信じられているからである<sup>17</sup>。

ただ実際には、イドリース朝以降の歴代王朝はシャリーフが統治する王朝ではなかった。再度この地域をシャリーフが治めるようになるのは、16世紀初頭に興るサアド朝以降である。しかし、独立以降の各国王は、同地域を治めた歴代王朝の連続性と伝統を、さまざまな場面で繰り返し強調してきた。これが、その統治体制の正統性を確保・維持するためであることは、疑う余地のないところである。

独立後のモロッコでは、国王の地位は原則として男子の長子相続としている。皇太子が未成年で国王に即位するような事態が起こった場合には、国王が満16歳に達するまで、複数の構成員（最高第一判事が議長を務め、上下院議長、ラバト・サレ地区ウラマー地域評議会委員長、そのほか国王が任命した10人）から成る摂政評議会が、憲法改正を除いて、憲法で定められている国王の諸権利・諸権力を行使する。

王族の範囲をどこまでとするかという点に関しては、明確な境界は設けられておらず、議論の余地が残るところではあるが、本稿では、儀礼や式典などで王族として表に出ることが多く、また公務を行う王族として発表される人物を、現在のモロッコ王家のメンバーとして扱う。それはつまり、歴代国

<sup>15</sup> シャリーフを自称するサアド家が、マラケシュを都に支配したモロッコの王朝。

<sup>16</sup> 森本一夫『聖なる家族：ムハンマド一族』イスラームを知る4、山川出版社、2010、3。

<sup>17</sup> 私市正年『北アフリカ・イスラーム主義運動の歴史』白水社、2004、95。

王とその兄弟姉妹，そして彼らの子どもである。図3は，モロッコの初代国王ムハンマド5世（在位1927～53, 55～61年）以降の王族メンバーである。なお，この表には各王族の配偶者は記載していない。この図を見てわかるように，王族の敬称として，男性は，「アミール」（王子）または「シャリーフ」+「ムーレイ」（私の主人，シャリーフに対して用いられる尊称）<sup>18</sup> + 名前という形式で呼ばれる（ムハンマドという名には，「ムーレイ」の代わりに「スィディ」<sup>19</sup> が付けられる）。女性王族は，「アミーラ」（王女）または「シャリーファ」+「ラッラ」（ムーレイに相当する女性に対する敬称）+ 名前という形式で呼ばれる<sup>20</sup>。

## II. 王妃

### —「皇太子の母」から「王妃」へ—

#### 1. 「皇太子の母」としての王妃

本節では，女性王族のうち，婚姻によって外から王家にやってくる王妃に注目する。アラブ世界において，国王の配偶者である王妃の役割やその地位は，国や時代によって大きく異なる。例えば，自身でもInstagramやFacebookを通じて，その日々の活動や公務の様子を積極的に発信しているアラブの王妃として，ヨルダンのラーニア妃が挙げられる。ラーニア王妃は，パレスチナ人の両親のもとクウェートで生まれた。地域情勢の悪化などから，20歳のときに一家でエジプトに移り住み，カイロ・アメリカン大学で経営学の学士号を取得，その後ヨルダンのシティ・バンクやアップル社で働いていた。93年，知人のパーティーで当時皇太子であったアブドゥッラー2世と出会い，結婚した。モロッコのサルマ王妃と同様に，ラーニア王妃もまた，国際親善やさまざまな活動に邁進している。特に女性や子どもの権利や教育に関する活動に励み，2007年にはユニセフ親善大使に任命された。

<sup>18</sup> アラビア語の名詞マウラー（支配者，主人）に由来する口語表現。シャリーフの中でも国王や王族，聖者，学者など特に秀でた者，地位の高い者に対して用いられる。大塚和夫ほか（編）『岩波イスラーム辞典』岩波書店，2001, 991.

<sup>19</sup> 男性に対して最も一般的な敬称。

<sup>20</sup> 「アミール／アミーラ」と「シャリーフ／シャリーファ」の称号がそれぞれ使われる場面を調べてみたものの，明確な使い分けは確認できなかった。「アミール／アミーラ」の方がより広く，頻繁に使用されている。

また多くのパレスチナ難民を抱えるヨルダンでは、その出自を活かし、王妃がヨルダン系住民とパレスチナ系住民との調整役にもなっている<sup>21</sup>。

モロッコの王妃はと言うと、現国王ムハンマド 6 世の配偶者であるサルマ妃から、その役割や地位が大きく変化した。詳細は後述するが、前国王ハサン 2 世の時代まで、王妃は皇太子となる男子を出産するまでは、その存在が隠されていた。また、モロッコの人口構成の微妙な均衡を維持するという政治的な理由から、正妻はベルベルでなければならなかったと言われている<sup>22</sup>。

モロッコの初代国王ムハンマド 5 世（在位 1909～61 年）は、生涯で 3 人の妃を迎えた。一人目は、娘 1 人をもうけたラッラ・ハニーラ・ビント・マアムーンであり、彼女の情報はほとんど残っていない。二人目は、国王の従妹であり、次期国王ハサン 2 世を含む 5 人の子を産んだラッラ・アブラ・ビント・ターハルである。アブラ妃の父は、アラウィー朝スルターン、ハサン 1 世（在位 1873～94 年）の息子であった<sup>23</sup>。彼女は、皇太子を出産したことから、「王母」(reine mère) または「君主の母親」(umm sīdī) と呼ばれていた。最後に、裕福なベルベル一族の出身で<sup>24</sup>、娘 1 人を産んだラッラ・バヒア・ビント・アンタルである。1954 年に娘のアミーナが生まれた際、ムハンマド 5 世は家族とともにマダガスカルに亡命中であり<sup>25</sup>、当時、妃は子どもが産めない体だと思いつ込んでいたと言われている。ムハンマド 5 世の王妃らについては、公開されている情報が非常に少なく、特に皇太子の母となったア

<sup>21</sup> 白谷「コラム 13：アラブ世界の王妃の新たなスタイル」278.

<sup>22</sup> 筆者による調査および複数の聞き取りから、こうした慣例が明らかとなったが、法律に明記されているものではない。またモロッコの民族構成について、同国では、人口の約 4 割をベルベルが占めており、同じくベルベルが居住するアルジェリア（人口の 20%）やチュニジア（同 1～2%）、モーリタニア（同 20%）などの近隣諸国と比較しても、モロッコにおけるベルベルの割合は圧倒的に高い。こうしたベルベルに対する歴代国王の対応やその歴史的変遷については、以下の論文を参照のこと。白谷望「現代モロッコにおけるアマズィグの政治的役割」『中東研究』526 (2016): 55–66.

<sup>23</sup> Ferran Sales Aige, *Mohamed VI: El príncipe que no quería ser rey*, Madrid: Los Libros de la Catarata, 2009, 79.

<sup>24</sup> Ibid.

<sup>25</sup> ムハンマド 5 世は、18 歳で父ユースフを継いでスルターンに即位した。1921 年には、フェズ条約によってモロッコの大部分がフランスの保護領となったが、その後モロッコ民族運動の象徴としての役割を果たした。1953 年にいったん廃位され、コルシカやマダガスカルに追放されたが、民族運動の高揚を背景に、55 年に帰国し復位した。

ブラ妃以外の2名については、ほとんど記録が残されていない<sup>26</sup>。

第2代国王ハサン2世は、同時期に従姉妹同士である二人の娘を王宮に迎え入れ、その後、1961年に数か月違いで二人と結婚した。一人目は、生涯子どもを持たなかったラッラ・ファーティマであり、13歳の時に王宮に迎え入れられた。もう一人が、次期国王であるムハンマド6世を含む5人の子どもをもうけたラッラ・ラティーファ・ハンムー<sup>27</sup>である。後者のラティーファ妃は、ケニフラ地域のベルベルであるザイヤーン部族のシャイフの娘であり、王宮にやってきた時は15歳であった。彼女も、皇太子を産んだことから、その存在が明らかとなり、皇太子出産後には「皇太子の母」や「王の子どもらの母」と呼ばれるようになった。しかし、皇太子の母であっても、彼女が表舞台に出てくることはなく、また1956年の勅令では、彼女の写真を公開することが禁止された<sup>28</sup>。この勅令を受け、週刊誌 *Al Ayām* の編集長が、彼女の写真を雑誌に掲載したことを理由に逮捕された<sup>29</sup>。この二人以外にも、ハサン2世は後年、何人かの妻を持ったようであるが、彼女らの詳細は残されていない<sup>30</sup>。

## 2. プリンセスとなった王妃

現国王ムハンマド6世の妃ラッラ・サルマは、モロッコで初めて表舞台に立った王妃であり、また同国初のアラブの一般家庭出身の王妃でもある。彼女はフェスで生まれたが、早くに母を亡くし、その後は姉とともにカサブランカに住む祖父母によって育てられた。大学では工学を専攻し、結婚するまで国内最大の王室系企業 ONA (Omnium Nord Africain) の情報エンジニアとして働いたキャリアウーマンであった。

ムハンマド6世とサルマ妃は2002年3月に結婚したが、その前年には王宮府を通じて二人の婚約が正式に発表された。婚約発表の時点で、サルマ妃

<sup>26</sup> ムハンマド5世にはそのほかに、奴隷の側室から生まれた娘が一人いる。

<sup>27</sup> ラティーファ妃は、1999年にハサン2世が亡くなった後、彼のボディガードであった男性と再婚している。Joseph A. Kéchichian, *Power and Succession in Arab Monarchies: A Reference Guide*, Colorado and London: Lynne Rienner Publishers, 2008, 396.

<sup>28</sup> *El País*, February 15, 2009 ([https://elpais.com/internacional/2009/02/15/actualidad/1234652401\\_850215.html](https://elpais.com/internacional/2009/02/15/actualidad/1234652401_850215.html) 2022年9月8日閲覧)。

<sup>29</sup> Ibid.

<sup>30</sup> Kéchichian, *Power and Succession in Arab Monarchies*, 396.

の写真やプロフィールが紹介され、結婚前のメディアには国王と二人の写真が出回った。また、結婚祝賀式典の様子が国営テレビ局で放送されることが決定された。皇太子となる男子を産むまで、存在そのものが秘められていた以前の王妃とはその扱いが大きく異なっていることがわかる。当初 2002 年 3 月に 3 日間の予定で計画されていた祝賀式典は、この時期のパレスチナ情勢の悪化により延期が決定されたが、規模を縮小する形で 7 月に行われた<sup>31</sup>。この式典は、200 組の新郎新婦を招待した合同結婚式として開催された。その後、ムハンマド 6 世によって勅令が出され、サルマ妃に「プリンセス」(amīra) の称号が与えられた<sup>32</sup>。王妃に対して、王家の血を引く王女たちと同じプリンセスの称号が与えられたのは、これが初めてのことである。婚姻後のサルマ妃は、自身の名を冠した「がん撲滅のためのラッラ・サルマ財団」(Fondation Lalla Salma: Prévention et traitement des cancers) を設立したり、WHO 親善大使を務めたりするなど、公の場で積極的に公務をこなし活躍するようになった<sup>33</sup>。

このように、国内外でさまざまな活動に邁進してきたサルマ妃であったが、2017 年末から、突然公の場に姿を見えなくなった。2018 年 2 月には、ムハンマド 6 世がパリで心臓の手術を受けたが、王宮府によって発表された術後の家族写真にも妃の姿はなかった。同年 3 月になると、国王とサルマ妃の 16 回目の結婚記念日に合わせて、スペインの女性向け週刊誌 *jHola!* が<sup>34</sup>、2 人はすでに離婚していると報道した<sup>34</sup>。国内では、そのほかにも「誘拐されたのでは」、「王宮に幽閉されているのでは」などの憶測が飛び交った<sup>35</sup>。しかし、この件について、モロッコの王宮府がコメントを発表することはなかった。その後、モロッコ王室のフランス人顧問弁護士エリック・デュボン＝モレッティが、これらの噂は事実と反する内容で王室メンバーを深く傷つける

<sup>31</sup> Marvine Howe, *Morocco: The Islamist Awakening and Other Challenges*, Oxford: Oxford University Press, 2005, 22.

<sup>32</sup> アラビア語で amīra とは王女を指し、一般的に国王の娘の敬称である。サルマ妃に与えられたこの称号を「王女」と訳すと混乱が生じるため、ここではカタカナでプリンセスと訳した。

<sup>33</sup> ムハンマド 6 世がサルマ妃と結婚する以前は、行事の場で国王には姉のマリアム王女が付き添っていた。

<sup>34</sup> *jHola!*, March 22, 2018 (<https://mx.hola.com/realiza/galeria/20180322121901/princesa-lalla-salma-futuro/1/> 2022 年 9 月 8 日閲覧)。

<sup>35</sup> *Gala*, September 20, 2019 ([https://www.gala.fr/l\\_actu/news\\_de\\_stars/exclu-scandalises-par-les-rumeurs-mohammed-vi-et-lalla-salma-du-maroc-brisent-le-silence\\_432466](https://www.gala.fr/l_actu/news_de_stars/exclu-scandalises-par-les-rumeurs-mohammed-vi-et-lalla-salma-du-maroc-brisent-le-silence_432466) 2022 年 9 月 8 日閲覧)。

行為であり、法的手段も辞さないと発表した際、サルマ妃を国王の「元妻」(ex-épouse)と表現した<sup>36</sup>。こうした一連の報道から、世論では二人の離婚は事実であるとの見方が広がったものの、離婚の理由などは明らかになっていない。離婚報道後にサルマ妃のプリンセスの称号が剥奪されるということはなく、また妃は「がん撲滅のためのラッラ・サルマ財団」の代表を続け、2020年9月には同財団の活動で3年ぶりにメディアの前に姿を現している。

### III. 王 女

続いて見ていくのは、王家の血統を継承する王女たちである。モロッコにおいて国王の娘たちは、アミーラ（王女、プリンセス）と呼ばれる。本節では特に、「聖なる」血統を継承する王女たちが、どのような人物を婚姻相手に選んでいるのかという点に注目する。対象とするのは、十分な情報が公開されている初代国王ムハンマド5世と第2代国王ハサン2世の娘たちである。

#### 1. ムハンマド5世の5人の娘

初代国王ムハンマド5世には、ハサン2世を含む二人の息子と5人の娘がいる。長女ラッラ・ファティマ・ザハラと次女ラッラ・アーイシャ、三女ラッラ・マリカの3人は、1961年に合同の結婚式を行った<sup>37</sup>。ムハンマド5世の一人目の妻ラッラ・ハニーラ・ビント・マアムーンの娘であり、ハサン2世の姉である長女ファティマ・ザハラは、従兄弟にあたるムーレイ・アリー・アラウィーと結婚した。彼は、アラウィー朝第20代君主ムーレイ・ユースフ（在位1912～27年）の孫にあたり、ムハンマド5世の弟ムーレイ・イドリースの息子である。ムーレイ・アリーは、ハサン2世の即位以降、国王の特別顧問やイラン特使、在フランス・モロッコ大使を務めるなど、ハサ

<sup>36</sup> *Morocco World News*, July 21, 2019 (<https://www.moroccoworldnews.com/2019/07/278785/king-mohammed-vi-ex-wife-lalla-salma-deny-rumors-of-custody-conflict> 2022年9月8日閲覧); *Histoires Royales*, July 30, 2019 (<https://histoiresroyales.fr/roi-du-maroc-divorce-mohammed-vi-lalla-salma-separation/> 2022年9月8日閲覧).

<sup>37</sup> *Time*, August 25, 1961 (<https://content.time.com/time/subscriber/article/0,33009,895629,00.html> 2022年9月8日閲覧).



ン2世の右腕として政治的重要ポストを歴任した<sup>38</sup>。政界を引退した後も、国内最大企業 ONA や Cosumar<sup>39</sup>、複数の国内メガバンクの CEO を歴任しており、経済界にも大きな影響力を有していた。二人の間には、ラッラ・ジューマラ、ムーレイ・アブドゥッラー、ムーレイ・ユースフの3人の子どもがいる。

ムハンマド5世の二人目の妻ラッラ・アブラ・ピント・ターハルとの娘である次女アーイシャ<sup>40</sup>は、61年の合同結婚式で、ムーレイ・ハサン・ヤアクビーと結婚し、二人の娘（ラッラ・ズバイダ、ラッラ・ヌフィーサ）をもうけたが、1972年に離婚した。その後同年に、モロッコ北部の都市テトワンで有力な政治家一族出身でありシャリーフでもあるムーレイ・ハサン・マフディーと再婚した。彼の父ムーレイ・ムハンマド・マフディーは、先述の第20代君主ムーレイ・ユースフの甥であり、1912年から56年までスペインの保護領下にあった北部の都市テトワンの初代ハリーファ（在位1912～23年）であった<sup>41</sup>。ムーレイ・ハサンも、父の死から2年後、テトワンの第2代ハリーファ（在位1925～56年）に任命された。モロッコの独立後には、イギリスやイタリアで大使を歴任した。

次女と同じく、ムハンマド5世の二人目の妻ラッラ・アブラ・ピント・ターハルとの娘である三女マリカは、1961年にムーレイ・ムハンマド・シャルカーウィー<sup>42</sup>と結婚した。二人の結婚後、ムーレイ・ムハンマドは、在フランス・モロッコ大使、マグリブ常設諮問委員会<sup>43</sup>委員長などの役職に就き、

<sup>38</sup> Ibid.

<sup>39</sup> 砂糖の抽出、製造を行うモロッコの政府系企業。砂糖の国内生産の70%を占める。

<sup>40</sup> アーイシャ王女は非常に優秀だったことから、後にハサン2世が在イギリス、在ギリシャ、在イタリアのモロッコ大使として彼女を派遣している。

<sup>41</sup> スペインの保護領となったモロッコ北部には、アラウィー朝スルタンの代理人であるハリーファ（*khalifa/jalifa*）が置かれていた。しかし実際には、実権は保護国であるスペインにあった。

<sup>42</sup> モロッコ初の大衆のタリーカであるジャズーリー教団の系統にあり、同国中部に位置するトドラ地域で名を馳せた聖者スィディ・ブーアビド・シャルキーを祖先とする一族。Mouna Hachim, *Dictionnaire des noms de famille du Maroc*, Casablanca: Autoédition, 2007, 192; *Ma'lamat al-Maghrib*, vol. 16, Salé: al-Jam'iyya al-Maghribiyya li-l-Tā'rif wa-l-Tarjama wa-l-Nashr, 2002, 5340-5341.

<sup>43</sup> マグリブ連合の前身組織。マグリブ諸国は、西アラブ諸国として共通の歴史文化の伝統をもち、民族運動の段階から協力関係の樹立を目指していた。64年にマグリブ常設諮問委員会が設置され、経済統合の促進がはかられたが、国家主権の壁にぶつかり、とくに75年以降、西サハラ問題のためにアルジェリアとモロッコの関係が悪化、地域統合は完全に挫折した。89年にはマグリブ連合と名称を改め、リビアとモーリタニアを加えて再出発したが、活動が停滞している。大塚ほか（編）『岩波イスラーム辞典』907。

その後も国家経済省、開発省、外務省、防衛省などの大臣職を歴任した。

ムハンマド5世とラッラ・アブラ・ビント・ターハルの娘である四女ラッラ・ヌズハは、1964年、アフマド・ウスマーンと結婚した。ウスマーン家はアルジェリア出身の一族であり<sup>44</sup>、アフマドの父もアルジェリアで生まれ、フランス軍に入隊し、その後モロッコで居を構えた。アフマドは、ハサン2世の小学校時代の学友であり、ハサン2世期の第8代首相（1972～79年）を務め、また2022年現在第一党の座に就く王党派政党「独立国民連合」（RNI: Rassemblement National des Indépendants）の創設者でもあり（1978年）、下院議長（1984～92年）も経験している<sup>45</sup>。

最後に、ムハンマド5世の3人目の妻ラッラ・バーヒア・アンタルとの娘であり、当時国王の亡命先であったマダガスカルで生まれた五女、ラッラ・アミーナである。彼女は医師であるムーレイ・イドリース・ワッザーニーと結婚し、娘ラッラ・スマイヤをもうけた。ワッザーニー家もまた、北部の都市ワッザーンに起源を持つシャリーフの一族である<sup>46</sup>。

## 2. ハサン2世の3人の娘

第2代国王のハサン2世には、次期国王となったムハンマド6世を含む二人の息子と、3人の娘がいる。なお、5人全員が、ハサン2世とラッラ・ラティーファ・アマフズーンの間の子どもである。

ハサン2世の長女ラッラ・マリアムは、ONAグループのCEOを務めた経験を持つフアード・フィーラーリーと1984年に結婚した。フィーラーリー家は、ムーレイ・イスーマーイール（在位1672～1727年）の治世にサハラ地域で名を馳せたシャリーフの一族で、フアードの父は、過去に首相や外相を務め、モロッコの主要友好国の大使を歴任した政治家アブドゥッラティーフ・フィーラーリーである。ラッラ・マリアムは、フアードとの間に一男一女（ラッラ・スハイナ、ムーレイ・イドリース）をもうけたが、1999年に離婚している。

次女ラッラ・アスマは、1986年にハリード・ブーシャントゥーフと結婚

<sup>44</sup> Hachim, *Dictionnaire des noms de famille du Maroc*, 410.

<sup>45</sup> Ibid.

<sup>46</sup> Ibid., 418.

した。ブーシャントウフ一族は、イドリース朝に起源を持ち、シャリーフであるアラミー家の分家である<sup>47</sup>。アスマ王女と結婚したハリードは現在まで、モロッコ硝子製造開発企業（S.E.V.A.M.: Société d'exploitation de verreries au Maroc）<sup>48</sup>の最高責任者を務めている。彼らも、一男一女（ムーレイ・ヤズィード、ラッラ・ヌハイラ）をもうけている。

ハサン2世の末子である三女ラッラ・ハスナは、1994年、外科医であるハリール・ベンハルビートと結婚した。二人は、ラッラ・ウマイマとラッラ・ウライヤの二人の娘を有している。

ここまで、歴代国王の娘である王女に注目し、彼女らの嫁ぎ先を中心に検討してきたが、人名辞典などで家筋を調べることができなかった人物を除き、王女の配偶者には、王家と同様シャリーフが選ばれる傾向があることがわかった。婚前から著名な政治家やビジネスマンだった者もいたが、そのほとんどが、結婚後に政治的もしくは経済的に重要なポストに就いている。こうしたシャリーフの血統を継承する女性の婚姻パターンについて、現代モロッコを事例とした研究は見つからなかったものの、例えば、19世紀アルジェリアのマスカラの法廷記録からは、女性がシャリーフの場合、バルバルとの結婚は難しいものであったことがわかる<sup>49</sup>。また、マーリク派に属するモロッコとは状況が異なるものの、サウディアラビアでは、シャリーフの女性がシャリーフ（同じ血縁集団）以外と結婚することは非常に稀である<sup>50</sup>。第III節で見てきたモロッコの王女らの婚姻は、王女らが実際には政治的権力を一切有していないことを考えると、結婚相手はシャリーフであるに越したことはないが、それ以上に王族の配偶者としてふさわしい高位の社会階層出身者が選択されていると考える方が妥当かもしれない。

<sup>47</sup> アラミー家は、モロッコ北部のテトワンとワッザーンの間に位置するベニー・アルースに廟を持つ聖者ムーレイ・アブドゥッサラーム・ベンムシーシー・アラミー（1163～1228年）を始祖とする。Hachim, *Dictionnaire des noms de famille du Maroc*, 151.

<sup>48</sup> 資本金1,600万ドルの硝子を扱う企業であり、年間2億本（内15%が海外向け）の硝子製品を生産している。

<sup>49</sup> Allan Cristelow, *Muslim Law Courts and the French Colonial State in Algeria*, Princeton: Princeton Legacy Library, 1985, 47-54.

<sup>50</sup> Nadav Samin, "Kafā'a ft l-Nasab in Saudi Arabia: Islamic Law, Tribal Custom, and Social Change," *Journal of Arabian Studies* 2-2 (2012): 109-126.

#### IV. 女性王族の活動・公務

ここまで、王室を構成する女性メンバーを、①外から王室に入る王妃と②王家の血統を継承する王女とに分け、その役割の変化や彼女らの婚姻や配偶者を検討してきた。第IV節では、モロッコにおける王族の活動や公務を考察していく。

モロッコに限らず、世界の君主制諸国において、王族／皇族による日々の活動や公務の様子が、積極的に公表されるようになっている。その媒体として、既存の新聞やテレビ・ラジオに加えて、近年ソーシャルメディアが情報発信の重要なツールとなっている。君主制国家において、王室は、義務、奉仕、自己犠牲、安定性、威厳、そして道徳的原理を具現する存在である<sup>51</sup>。ほかの君主制諸国と同様に、モロッコでは、王室全体で数多くの団体の会長や総裁を務めており、また王室外交と呼ばれる国際親善も、王室メンバーの重要な活動の一つである。その中心を担っているのが、王妃と皇太子、そして国王の兄弟姉妹である。

まずは、男性王族メンバーの活動から見ていきたい。ムハンマド6世の一人息子であり、2022年9月現在19歳であるハサン皇太子は、2012年頃から、国王やその弟ムーレイ・ラシードとともに、さまざまな公務に参加してきた。国王が演説を行う際には、その後ろにラシード王子とハサン皇太子が並ぶのが基本形となっている。ハサン皇太子が出席することの多い活動は、自然公園の開園式やスポーツ関係のイベント、雨乞いの祈りである。2017年にパリで開催された気候変動サミットには、国王とともに最年少参加者として出席し、フランスのメディアでその様子が報じられた<sup>52</sup>。最近では、国賓接遇も担うようになり、2019年2月に英国のヘンリー王子とメーガン妃がモロッコを訪れた際には、国王の兄弟とともに、同夫婦をもてなした。単独での公務も増え、2019年には、タンジェに新しく建設された港 TANGER-MED2 での開港式に国王の代理として出席した<sup>53</sup>。また同年9月には、パリ

<sup>51</sup> 君塚直隆「女王陛下とイギリス王室：地上最後の王様？」水島・君塚（編）『現代世界の陛下たち』53。

<sup>52</sup> *Morocco World News*, December 13, 2017 (<https://www.morocccoworldnews.com/2017/12/236325/crown-prince-moulay-el-hassan-one-planet-summit-king-mohammed-vi> 2022年10月3日閲覧)。

<sup>53</sup> *Maghreb Arab Press*, June 29, 2016 (<http://www.mapnews.ma/en/activites-principieres/hrh-crown-prince->

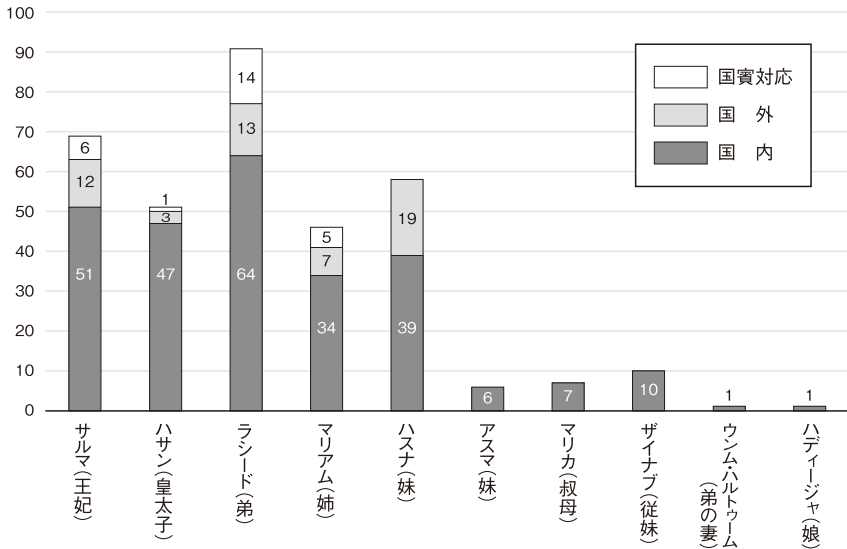


図4 各王族の公務の回数(2013年～現在)

出所：Ministre de la Culture, de la Jeunesse et des Sports, porte-parole du gouvernement; <http://www.mapnews.ma/> (2022年9月8日閲覧)。

で行われたシラク元仏大統領の葬儀に単独で出席している。

ムハンマド6世の弟であるムーレイ・ラシードは、特に、ハサン皇太子が16歳で成人するまでは、国王を除く唯一の中心的男性王族として、数多くの公務を担当してきた。また、国王の代理として公務を行うことが最も多い。現国王ムハンマド6世は、父であるハサン2世とは異なり、表舞台に出ることをあまり好まないと言われており、国王の代わりとして外国訪問や国際会議に出席することも多い<sup>54</sup>。国内での公務では、主に、軍関係の式典やスポーツイベントに出席している。

次に、女性王族メンバーの活動を見ていく。サルマ妃の活動については、第II節で論じたため、ここでは詳細は省くが、図4の通り、女性王族の中

moulay-el-hassan-represents-hm-king-ceremony-launch-port 2022年10月3日閲覧)。

<sup>54</sup> 白谷望「政治的安定を資源とするモロッコの外交政策」『中東研究』533(2018): 129; Daniel Zisenwine, "Mohammed VI and Moroccan Foreign Policy," in Bruce Maddy-Weitzman and Daniel Zisenwine (eds.), *Contemporary Morocco: State and Society under Mohammed VI*, Abington: Routledge, 2013, 71.

で最も多くの公務を担当していた。妃の公の場での活動を確認できるのは、国王と離婚したとされる 2017 年末までのため、2013 年からの 5 年間で数多くの公務にあたっていたことがこの図からわかる。

前国王ハサン 2 世の長女であり、現国王の姉であるラッラ・マリアムは、ムハンマド 6 世の結婚前そして離婚後は、国賓対応などで国王に付き添う役を担っている。2019 年に英ヘンリー王子夫妻がモロッコへ訪問した際にも、メーガン妃の隣りには常にマリアム王女の姿があった。彼女は長女ということもあり、ほかの王女と比較して、非常に多くの団体の会長や総裁を務めている。例えば、「王立軍社会事業協会」会長や「UNICEF が支援するモロッコ女性協会」会長、「子どもの人権国家監視局」代表、「在外モロッコ人のためのハサン 2 世基金」代表、「全国モロッコ女性連盟」代表、「退役軍人のソーシャルワークのためのハサン 2 世財団」代表、UNESCO 親善大使、「失踪・虐待児童のための国際センター」(ICMEC) 名誉委員などである。これらの一覧を見てわかる通り、女性や子どもに関係する団体に多くかかわっている。

次女のアスマ王女は、「聴覚障害を持つ子どものためのラッラ・アスマ基金」代表や「モロッコ動物・自然保護協会」会長を務めている。三女のラッラ・ハスナは、国王の離婚後、サルマ妃に代わっての公務、特に国外での公務が急増した(図 4)。2018 年には、単独で日本を訪問し、「ムハンマド 6 世環境保護財団」代表として、立命館大学で名誉博士号を授与されている<sup>55</sup>。同団体の代表以外にも、「全国女性公務員・準公務員連盟」代表、「エイズの子どものためのモロッコ協会」会長、「モロッコ SOS 子ども村」代表などを務めている。

文化・青年・スポーツ大臣兼政府報道官のホームページで確認することができる 2013 年以降の王室の公務・活動報告を見ると、国王の配偶者や兄弟姉妹、皇太子のほかにも、国王の娘であるハディージャ王女、国王の叔母、従妹、ラシード王子の妻などの公務が確認できた。ここで疑問として残るのが、皇太子と国王の弟以外の男性王族が公務にあたることはないのかという点であろう。同ホームページを含め、近年、王族の結婚式や宗教関係の儀礼以外で彼ら以外の男性王族が公務にあたったという報道は見つからない。そ

<sup>55</sup> 立命館大学ホームページ (<https://www.ritsumei.ac.jp/news/detail/?id=125> 2022 年 9 月 8 日閲覧)。



の一方で、国王の従弟にあたるムーレイ・ヒシャームは、度々メディアを騒がせて世間の注目を集めている。ヒシャーム王子は、王室メンバーでありながら、これまでに何度もモロッコ王室の改革の必要性を主張しており、2015年には、王室財政の調査と公開を要求した<sup>56</sup>。さらに、2018年には、France 24のテレビ番組でのインタビューで、王族の称号の返還と王室からの完全な離脱、そして死後は一切関係のない場所への埋葬を希望する旨を記した書簡を国王に送ったと発言した<sup>57</sup>。この書簡に対して、国王からの返信はなかったという。

これまでに見てきた近年の王室による公務の状況は、モロッコでは男性王族と女性王族の活動の間に目立った特徴や違いはなく、それぞれが担当する公務は、王族個人の関心に基づいていることを示している。同時に、現国王の兄弟姉妹で長子となるマリアム王女や国王の代理を務めることの多い弟ラシード王子が、数多くの公務を担っていることが明らかとなった。また離婚前のサルマ妃は、ほかの王族以上にさまざまなイベントに出席していた。このように、王室全体で数多くの団体の会長や総裁を務めているモロッコ王室だが、ムハンマド6世の離婚や各王族が持つ子どもの数の減少、さらに、王室内からの離脱を求めるメンバーの登場など、今後王族数が減少することが予想される。そうなった場合、これらの公務のあり方や王室の範囲に変化をもたらす可能性もあるだろう。

## V. おわりに

### —秘められた王室か、開かれた王室か—

本稿では、モロッコの女性王族に焦点を当て、彼女らの地位や役割の変化を検討してきた。ここでは、国民の心理という側面から、こうした変化を考察したい。

第1節で見てきたように、現在のモロッコは、その「安定性」と「連続性」の上に成り立っていると言っても過言ではない。他方で、若くして国王の座

<sup>56</sup> Kéchichian, *Power and Succession in Arab Monarchies*, 399.

<sup>57</sup> France 24, December 24, 2018 (<https://www.youtube.com/watch?v=7-QuuNSQnXg> 2022年9月10日閲覧).

に就いた現国王ムハンマド 6 世は、モロッコの国家建設を強権的な姿勢で進めた父ハサン 2 世のイメージを払拭するかのようになり、国民にとって身近な国王となるべく、自身を「国民の第一奉仕者」(*khadīmuk al-awwal*)<sup>58</sup>や「全モロッコ国民の王」(*malik li-jamī‘ al-maghāriba*)<sup>59</sup>と位置づけ、即位直後からさまざまな改革を進めてきた。その一つが、女性の地位向上である。2004 年には国王主導で家族法<sup>60</sup>が改正され、女性の最低婚姻年齢の引き上げや離婚申し立ての権利向上が図られた<sup>61</sup>。

こうした流れと並行する形で、SNS などの新たなメディア媒体も利用しつつ、王室メンバーが担う公務や慈善活動の様子が、積極的に報道されるようになった。表舞台に立ち始めた女性王族たちは、いわば社会で活躍し始めた同時代の女性らを代表するような存在として捉えられるようになってきている。その中で最も国民に近しい存在として考えられてきたのが、王妃であるラッラ・サルマであった。

先述の通りモロッコでは、前国王の時代まで、王妃の存在は皇太子となる男子が誕生するまで明かされてこなかった。皇太子が生まれた後も、彼女らはあくまで跡継ぎを産んだ「皇太子の母」もしくは「王の子どもらの母」であり、王妃として表に出ることは一切なかった。ハサン 2 世下では、メディアが王妃の写真を公にすることを禁止する勅令が出されたほどである。また、この時代まで、王妃は国内の民族的バランスの調整役として、有力なベルベルの一族から選ばれるという慣例があった。こうした王妃の地位や役割

<sup>58</sup> *Al-'Alam*, July 31, 2012; July 31, 2015.

<sup>59</sup> *Al-'Alam*, July 31, 2014.

<sup>60</sup> イスラーム世界における婚姻や相続についての法。「家族法」という立法制度は近現代に制度化されたものであり、現在の「家族法」の領域は、第二次世界大戦期まで社会生活の全てを対象としている「イスラーム法」の一部であった。イスラーム法において、結婚・離婚に関する規定はその中核をなしており、今なお原形をとどめている数少ないイスラーム法の分野でもある。モロッコをはじめ一般的には「家族法」と呼ばれるこの領域だが、国によっては「身分法」という名称をとるチュニジアやレバノン、「婚姻法」と呼ぶインドネシア、またこの領域についての法をまとめて「身分関係法」と呼ぶ学者もいる。

<sup>61</sup> 2004 年の家族法改正によって、結婚可能な最低年齢が 14 歳から男女ともに 18 歳へ引き上げられ、加えて妻側の男性親族の同意を必要としない自由結婚が認められることとなった。また、結婚時に結ばれる契約を夫が侵害した場合には、女性からの離婚申し立てが可能となった。イスラーム主義者たちの反対により一夫多妻制の廃止は行われなかったが（ただし、二人以上妻を持つ場合は裁判官の承認が必要）、妻は夫に対して、複数の妻を持たないよう契約を結ぶことが出来るようになった。白谷望「現代モロッコにおけるイスラーム主義政党の組織戦略：政権獲得をめぐる意思決定」*AGLOS: Journal of Area-Based Global Studies* 3 (2013): 51.

が大きく変わったのは、ラッラ・サルマ以降である。結婚を機に、王妃として初めて「プリンセス」の称号を与えられた彼女は、モロッコの歴史で初めて公の場で活動する王妃となり、ほかの王女らと同様に、数々の公務を担うようになった。

また、サルマ妃がそれ以前の王妃とは異なり、一般家庭出身であることも、モロッコ国民に親近感を抱かせた要因の一つであろう。ムハンマド6世との婚姻後は、とりわけ女性雑誌において、夫婦の写真や子どもらを囲んだ家族写真が頻繁に掲載され、また日々の活動の様子とともに、王妃の服装や伝統衣装、アクセサリーの着こなしにも注目が集まるようになった。そこには、幸せな王室、そして華やかな王室のイメージが投影され、かつ理想的な女性の範としての王妃像が確立されていくことになった。そのほかの女性王族らも、その精力的な活動が日々メディアで扱われるようになったのは、第IV節で見てきた通りである。

ただ、大々的に報じられたムハンマド6世と妃の結婚に対し、彼らの離婚については、現在まで公式な発表は行われていない。過去の王妃のように、その地位が「皇太子の母」のままであれば、その存在は秘められたものであり、結婚時と同様、離婚についても公式の発表は必要なかったであろう。しかし現国王の離婚に関しては、サルマ妃がメディアから姿を消す直前まで精力的に数々の公務をこなしていたことから、さまざまな噂や憶測が飛び交うことになった。また、近年表舞台に立ち始めたのは、王妃だけでなく、王女たちも同じで、その結果、国王の姉マリアム王女の離婚や姪スカイナ王女の婚約破棄なども、メディアでさまざまに報道されることになった。

ここに、「開かれた王室」のリスクの一端を見ることができる。これは何も王室の結婚や離婚に関することだけではない。現在多くの君主制国家では、メディアを通じた王室メンバーの広報活動が行われており、彼らの日々の生活の様子もあわせて公開することで、王室に対する国民の親近感を促す「開かれた王室」を目指す傾向にある。しかし同時に、王室がより身近な存在になることによって、彼らのスキャンダルも自由に報じられるようになっている。本稿で見てきたモロッコにおいても、ムハンマド6世下で「秘められた王室」から「開かれた王室」への転換を進めた結果、王室内部の対立が外部にも伝わるようになった。現国王の従弟であるムーレイ・ヒシャームの王室改革要求が、この例である。彼は、モロッコ王家の存続のための真の民

主化の必要性を主張し、また自らの王室離脱を要求した。こうした内部からの批判は、現在の君主制のあり方が民主的ではないという考え方と繋がり、このような考えを持つ者が、王室の事情を最もよく知る王族ににいるということは、王制そのものの正当性を揺るがす可能性がある。こうした内からの批判を、今後モロッコ王室はどのように防いでいくのか。また、ムーレイ・ヒシャームのインタビューや現国王の離婚は、海外のメディアで最初に報じられており、ハサン2世の時代のように、国内の報道を規制したとしても、その効果は限定的だろう。

「開かれた王室」のリスクは、王室に関する報道が、一定程度自由に行えるようになったことの結果でもある。王室に関する報道が増加することにより、王室にとって必ずしも有利とはならない情報が広まることもある。例えばモロッコでは、王室財産に関する報道は、最近まではある種「タブー」の領域であった。王制のあり方やその存続が、世界のさまざまな国家で試行錯誤されているが、どの程度開かれた王室が国家の安定のためには適切なのか。この問いは、モロッコを含む世界の君主制が今後考えていくことになる課題であろう。